



**Data**

監督：リュック・ベッソン  
 脚本：レベッカ・フレイン  
 出演：ミシェル・ヨー/デヴィッド・シューリス/ジョナサン・ラゲット/ジョナサン・ウッドハウス/スーザン・ワールドリッジ/ベネディクト・ウォン/フトゥン・リン/アガ・ポエチット

## 👁️👁️ みどころ

日本では民主主義も選挙も形骸化し機能不全に陥っているが、ミャンマーの民主化闘争とは？その指導者アウンサンスーチーとは？佐藤栄作元総理のノーベル平和賞受賞には違和感ありだが、彼女は満場一致。

他方、『マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙』（11年）にみるサッチャーに比べると、彼女の政治的功績は？それは、やっと選挙が実施され、政治家スーチーが誕生したこれからの話。本作で彼女の半生を学び、「私たちの自由のためにあなたたちの自由を行使してください（Please use your liberty to promote ours）」という言葉の重みを噛みしめなければ・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■世界が今ミャンマーに注目！海外投資も続々と！■□■

多くの日本人はビルマ（現ミャンマー）という国については竹山道雄の小説『ビルマの豎琴』（1947年）で知っているくらいだろうが、アウンサンスーチーという女性も日本でも有名。それは、長年続く軍事政権の下で彼女はNLD（国民民主連盟）を率いてミャンマーの民主化運動に尽くしてきたからだ。彼女への弾圧は「自宅軟禁」という形だが、本作を観るとおよそ24年間の政治活動の中でそれが通算約15年間も続いてきたというからすごい。日本の佐藤栄作元総理が1974年にノーベル平和賞を受賞したのは意外だったが、アウンサンスーチーが1991年にノーベル平和賞をアジア初の女性として受賞したのは当然だ。

そんなアウンサンスーチーが今世界的注目を集めているのは、2012年4月に実施されたミャンマー連邦議会補欠選挙で彼女自身が当選を果たすとともに、NLDが圧勝した

ためだ。以降ミャンマーの民主化は急激に進んでいるから、海外からの投資も続々と！内  
向き志向が強まり、中国や韓国資本に次々と「商圈」を荒らされているわがニッポン国も、  
ここは一発ミャンマーへの投資で逆転打を放たなければ・・・。



『The Lady アウンサンスーチー ひき裂かれた愛』

7月21日(土) 角川シネマ有楽町ほか 全国ロードショー

配給：角川映画 © 2011 EuropaCorp - Left Bank Pictures - France 2 Cinéma

## ■□■ 2つの意味でグッドタイミング！ ■□■

本作は、2007年に作家でもあるレベッカ・フレインが書いた脚本に女優ミシェル・  
ヨーが出会い、友人のリュック・ベッソン監督にプロデューサーをお願いしたことをきっ  
かけに生まれたらしい。しかし、その当時のミャンマーには今のような民主化は全く期待  
できなかったから、アウンサンスーチーを主人公とする映画をつくろうとしても、それは  
相当しんどかったはず。本作のストーリーはアウンサンスーチーの政治活動に焦点をあて  
たものではなく、「ひき裂かれた愛」が邦題のサブタイトルとされていることからわかるよ  
うに、アウンサンスーチーの孤独な軍事政権との闘いを支えたイギリス人の夫マイケル・  
アリス（デヴィッド・シューリス）との愛に重点をあてたものになっている。

ミャンマー民主化の象徴ではあっても、アウンサンスーチーによる目立った政治的功績  
はないから、彼女を主人公にした映画を製作するにあたって、それはやむをえない選択だ  
ろう。ところが、本作を製作する過程で大きく政治情勢が動き、完成時には民主化が大き  
く進んできたからまさにそれが第1のグッドタイミング。また第2のグッドタイミングは、  
国際的に活躍する女優ミシェル・ヨーを主演女優に迎えることができたことだ。ミシェル・  
ヨーは1962年生まれだから1945年生まれのアウンサンスーチーより大分若い、

その顔立ちもスタイルもアウンサンスーチーにそっくり。髪に花の飾りをつけ、ミャンマーの民族衣装を着ると、まさにアウンサンスーチーと瓜二つ。今この時期に、そんな主演女優とめぐり会えたことが第2のグッドタイミングだ。

## ■□■本作鑑賞日にTVでも晴れやかな顔を・・・■□■

私が本作を観た6月21日は野田総理が消費増税法案の衆議院での採決期限としていた日だが、その日の政治の混乱状況はご存知のとおり。そんな中TVニュースで見たのが、6月20日に行われたオックスフォード大学での名誉博士号授与式の様子と6月21日にアウンサンスーチーがイギリス議会同院で演説する姿。ミャンマー国内での政策課題が目白押しの今、アウンサンスーチーが政治家として初の外遊に赴くことには一部反対意見もあったが、イギリスでの前述の行事の他、6月16日に実施されたノルウェーでのノーベル平和賞受賞演説はアウンサンスーチーにとって何よりも価値のあること。またミャンマー（人民）にとっても、アウンサンスーチーがこのように積極的に海外に出かけてミャンマー民主化への支援を訴えることは、大きな価値があるはずだ。もっとも6月19日の67歳の誕生日に、チベット仏教最高指導者ダライ・ラマ14世と会見したことがビックニュースとして報道されたが、これには中国はカリカリしているはずだから、用心が必要。

アウンサンスーチーはこれまでは自宅軟禁の中で民主化のために闘う不屈の闘士というイメージを売ってきたが、これからは政治家として自由に動く中でどんな成果を挙げることができるかが勝負。本作鑑賞日にTVで見た晴れやかな顔を今後も失うことなく、ミャンマーの民主化を推し進めてもらいたいものだ。

## ■□■半生記としては貴重だが、映画的には・・・？■□■

本作は、ビルマの独立を勝ち取った後もビルマのために献身的に働いていたアウンサン将軍を、アウンサンスーチー2歳の時に失うシークエンスからスタートする。迎える車に乗り込む前に髪にさしてくれた一輪の花が、成人してからのアウンサンスーチーのトレードマークになったわけだが、さてその意味は？アウンサンスーチーがビルマの民主化運動に参加することになったのは、1988年に病気の母親を看病するためラングーン（現ヤンゴン）にある実家に戻っていた時に、軍事政権による民主化運動の弾圧が始まったためだ。「ビルマ建国の父」と称されて、国民から敬愛されているアウンサン将軍の娘で、オックスフォード大学で学んだ才媛ともなれば、民主化運動の指導者として申し分なし。そんな周りの声に押されてアウンサンスーチーはNLDの代表となり、民主化運動に身を投じていったわけだが、そうなると夫マイケル・アリスや2人の子供たちは・・・？

メリル・ストリープが2012年第84回アカデミー賞主演女優賞を受賞した『マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙』（11年）でも、夫デニス・サッチャーの愛が大きく彼女を支えたことが描かれた（『シネマルーム28』29頁参照）が、サッチャーの場合は首相就任後の政治的功績がすごいから映画化は容易。しかし、自宅軟禁処分を受けてからもずっとビルマにとどまり、民主化運動の象徴として存在していること自体が価値だったアウンサンスーチーの場合は、政治家としてのドラマ性は低い。したがって、本作はイギリ

スからアウンサンスーチーを支え続けてきた夫マイケル・アリスとの愛を軸としてストーリーが展開することになるから、アウンサンスーチーの半生記の記録としては貴重だが、映画的には？もっとも、ノーベル平和賞の授賞式で長男のアレクサンダー（ジョナサン・ウッドハウス）が代理スピーチを行うシーンや、それをラジオで聴こうと必死になるアウンサンスーチーの姿などは感動的。さすが、リュック・ベッソン監督とミシェル・ヨーが心を1つにしてつくった映画だと納得！

## ■□■「私たちの自由のためにあなたたちの自由を・・・」■□■

『マーガレット・サッチャー 鉄の女の涙』では、民主主義国家における抗争の凄まじさとその中で闘う鉄の女サッチャーの価値を学ぶことができたが、本作では軍事政権のえげつなさと民主主義の大切さを学ぶことができる。2010年から2011年にかけてチュニジアやエジプトで起きた「アラブの春」では、国民の直接投票で指導者を選ぶという民主主義の大切さがアピールされたが、他方で現在の日本のような、議論と内輪モメばかりに明け暮れて何も決められない民主主義は困ったもの。昨今やっとな憲法改正の機運が少し高まってきたが、もともと「権利の章典」としての憲法は国王の専制政治から国民の基本的な人権を守るためにつくられたもの。ところが今や、憲法上の基本的な人権の尊重は当然だが、権利ばかりが主張され、それを行使することに伴う負担とか、その反面として存在する義務とかの議論は完全に軽視されている。負担とか義務とかの話はそっちのけで権利ばかり主張し、他人の自由はさておき自分の自由だけほとんど主張する今の日本国のような国は、世界中どこを探しても存在しないのでは？そんな風に現状を憂えている私には、本作終了後字幕に流れるアウンサンスーチーの「私たちの自由のためにあなたたちの自由を行使してください（Please use your liberty to promote ours）」という言葉がグサリ！まさにこれこそ今の日本人に強く聞かせなければならぬ言葉だが、私が言ったのでは説得力なし。15年間も自宅軟禁状態に置かれながら民主主義のため、自由のために闘ってきたアウンサンスーチーの言葉だからこそ、その重みをしっかり受け止めなければ・・・。 2012（平成24）年6月22日記

### ミャンマー投資と水島上等兵

1) 急速にミャンマーの民主化が進む中、日本はミャンマー投資の主役に躍り出た。その背景にはミャンマー（旧ビルマ）も中国や韓国と同様に日本軍に占領されたにもかかわらず、東南アジアの国として戦後最初に日本と平和条約と賠償・経済協力協定を結ぶほど日本に友好的だったという事情がある。

2) 竹山道雄の名作『ビルマの堅琴』は市川崑監督によって二度映画化されたが、その主人公たる水島上等兵が日本に帰らずビルマで僧侶になったのはなぜ？そんな原点をおさえ、また「殖生の宿」を口ずさみながら今後のミャンマー投資の戦略を考えたい。

2012（平成24）年11月1日記